

五年に家新築、借金返済のため日夜努力したが、アッと云う間に六十歳となり、職業婦人として三十年たち、退職してから十年余現在のはのんびり一人暮らしをしています。すが、今だに苦しかった人生をふり返っている毎日です。

二度と再びあの苦労はと思う今

北海道 北野喜美

一九九〇年八月二日のイラク軍の突然のクウェート侵攻を新聞、テレビは、在留邦人婦女子の引揚げ、一般邦人の人質拘留、軟禁と大きく報じました。

四十五年前の八月二十二日夫を残し、十四歳を頭に六人の子供を連れ、緊急疎開の名のもとに樺太大泊港から稚内港に上陸、夫の帰国するまでの三年間の悪夢、二度と再び思い出したくないと思っていたことを、またも戦禍のための引揚げだ、拘留だと同じようなことをなぜ繰り返さなければならぬのでしょうか。腹立たしい思い

にかられ当時を思い返して見ました。

昭和五年勤務していた樺太豊原貯金局を退職、鉄道員の夫と結婚。豊原、落合、中野、鶴巣、久春内、大泊、豊原と樺太各地を駅長稼業の夫と共に転住、三男三女の子供達と幸せな毎日でした。八月九日突如としてソ連の参戦八月十五日の終戦となった。

当時樺太鉄道局真岡出張所に赴任していた夫が、二十一日帰宅疎開だと、荷物は後から送るからと着のみ着のまま、豊原空襲を逃げ回りながら貨車で大泊港へ、波止場の岸壁の人波の中を乗船、甲板の片すみへ家族を座らせ「仕事が残っているから」と夫は下船。女子供に限る緊急疎開といいながら、ご主人と一緒に人達を羨望の目で眺めながら、一緒に船の上まで乗ってなぜ下船しなければならぬのか、馬鹿正直過ぎたのではないかと、と恨みながらの三年間の長かったこと。

煙突の下の甲板は降ってくる大つぶの油煙をかむこともできないほど、身動きもできない船上からは豊原の空襲による天を焦がす猛火を「終戦後一週間もたった今、なぜ」と周囲の人々の憤りをききながら稚内へ。

乳飲み子を背負い十四歳を頭に五人の子供達を紐で連ねての上陸、人の渦の中、どの列車に乗るべきか、漸く函館行の列車を見つけたときは満員、通路に座って二十数時間、敗戦による逃避行の意味も理解せずに子供達は、着替も持たずにリュックの中から教科書や絵本を出して見ている有様。

これからどうなるのかと一睡もできず案じているうちに函館へ。乗り換えで渡島福島の二十数年振りに会う叔父の家へ。招かざる突然の貧客、食糧難、インフレ、鉄道局のつてを頼って札幌へ、そして現住地の芦別へと九か月の間に三か所を転々と歩き、夫の不在をなげき、あるときは人の情を喜び、あるときは無情をのろい、持ったことのないスコップで石炭下しをさせられ、買い出しに出かけ、八畳一間に七人暮らし、全く悪夢のような三年間でした。

でも、六人の子供達は栄養不良ながらも元気な姿で夫に見せられたことは無上の幸だったと思っています。

引揚げ後家族のために苦勞してくれた夫の十七回忌も過ぎ、夫の残してくれた年金に感謝し、今は定年を迎え

た長男夫婦とともに、一人も欠けていない子供達や孫や曾孫の便りを待ちながら趣味の手芸で楽しく過ごさせて戴いております。二度と再び、誰れにもあの苦勞はさせたくないと思っています。

引揚げ・開拓に入植、

荒地に悩む十年

北海道 佐々木 末太郎

海外移住の動機と家族の状況

私の父が明治三十九年から樺太西海岸鶴城村に毎年漁夫十人ぐらいを連れて春五月初め渡樺し（鶴城村に）海が荒れて漁が出来なくなる九月中旬切揚げて郷里亀田郡錢亀沢村（函館市と三里位離れている）に帰って来ます。毎年その繰返しです。私も父に連れられて渡樺していったのですがだんだん漁も不況になり帰郷することが出来ず大正三年五月頃から樺太に永住するようになり、その後漁業から農業に転向し父が死亡（昭和六年没）